51

富士川游の人間観

土屋　　久
順天堂大学医史学研究室研究生

はじめに

筆者は先に，富士川游（1865–1940）の晩年顕著に現れる人間形成論的な思想を，同時代（1930年代後半）の思潮である教養主義との関連で論じる発表をおこなった．

本発表は，上記の延長として，富士川の理想とする人間像，とりわけ医療者としてのそれを，富士川の同郷の後輩で哲学者の三枝博音（1892–1963）の先行研究を伴走者に得て，富士川最晩年の著作群から明らかにしたい．

1　人間の理想像

富士川は，『宗教の教養』の中で，人間の理想について以下のように語っている．

> （第一）精神文化をすすめて知能を十分に発揮せしめること（第二）社会的感情を美しくして国民的倫理を発達せしめること（第三）人間の最後の価値層として経済を調整すること，及び（第四）人間のすべての文化の最高規範としての宗教を教養して，これによりて，文明的であり，理性的であり，哲学的であり，道徳的であり，殊に宗教的であるところの完全の人間となることが人間の理想とせられねばならぬ．

この引用から理解される通り，富士川にあっては，人間の完成において宗教は最重要な課題であって，これなしには人間の完成はなしとげられないものであることがわかる．では，いかにして宗教性を帯びた人格をつくりあげることができるのか．この点に関して，富士川は内観の重要性を説くのである．

2　内観の重要性

富士川は，内観を次のように説明する．

> 内観は，自分の心の内面を省みて，その現実の心の状態が虚仮・不実・醜悪・無智にして何とも名状することの出来ぬほどに劣等のものであるといふことを知ることを以てその極致とする（『宗教の教養』）．

自身の心に深く沈潜し，その状態が劣等であることを認識していく過程が内観であるといえよう．この内観には，道徳的な内観と宗教的な内観とがあり，富士川は，道徳的に如何とも出来ない自身の愚劣さを認識した時に，宗教的な内観が深まっていくとし，「宗教は道徳を超越したもの」（『宗教の教養』）としている．

3　理想的人間の具体相

内観の極致に至った理想的な人格の具体相として富士川は，『新選妙好人伝』の中で，松尾芭蕉，大和清九郎をはじめ，十四人の人物を挙げている．さらに，この著作とほぼ同時期の『訳解漫游雑記』では，永富独嘯庵（1732–1766）の医師としてのあり方に，深い共感をよせている．独嘯庵は，言わずと知れた江戸中期の山脇東洋門下の医師である．この独嘯庵に富士川が共感を寄せた理由として，三枝博音は，「先生が真に独嘯庵に共感した点は，独嘯庵の医術における自己内観の深さと鋭さにある」とするが，これは的を得た指摘である．やはり，三枝も引いている箇所ではあるが，独嘯庵は，自身の人生を回顧して次のように言っている．

> 吾人古医方に従ひ，精勤十数年，終に絶倫の地に到ること能はざるものは他なし，栄辱非誉の心，中に動けばなり（『訳解漫游雑記』）．

こうした永富独嘯庵の言葉の中に，富士川は，先に見た内観の極致をみたといえるであろう．

おわりに

富士川の有名な著作に『医術と宗教』と題するものがあるのはよく知られている．富士川は，この題をつけた理由を，「医家がその方術を施行するに方りて，いかに宗教の心の発現が大切の役をなすものであるかといふことを叙述せむがためである」としている．

本発表では，その宗教の心が発現した具体的な医家を永富独嘯庵の中に見いだした．